

主題	ショートステイでおこなう世代間交流について
副題	～子どもとお年寄りの世代間交流と職員間連携のあり方～
アクティビティ 職員間連携	

研究期間	12ヶ月	事業所	短期入所生活介護・短期入所生活介護事業所 うきま幸朋苑
発表者：栗栖 良（くりす りょう）			アドバイザー：川崎 初美（かわさきはつみ）
共同研究者：小泉美香（保育）、菊池智司（保育）、山下哲平（保育）、ショートステイ職員一同			

電 話	03-5914-1331（代）	メール	ukima@kohoen.jp
FAX	03-5914-1350	URL	http://www.kohoen.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京都北区で、初の完全個室ユニット型特養として7年目を迎える。保育園・就労支援施設を併設する複合施設であり、世代間交流やイベント、ボランティアの方々も定着しつつある。浮間庚申通り商店会に入会し・赤羽消防団第7分団に団員を入会させるなど、地域交流も深めている。ショートは、定員19名、アクティビティー活動の定着化と個室でゆったりと過ごせる空間が特徴です。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

当事業所では、配置人数の少なさ、職員の定着率が低いという運営上の問題と、ご利用者が毎日入れ替わり、特養と比べて業務内容が多いという、ショートステイ業務の特徴により、アクティビティはおろか、ケア内容の掘り下げさえ不十分な状況であった。介護業務の優先順位としては、アクティビティに力をいれるより、ルーチンワークをきちとこなそう、今日一日何も起こらなければ良いと思っている職員が多い状態であり、職員間の連携も乱れがちで、コミュニケーション不足も課題であった。環境として恵まれているはずの、保育園併設施設にも関わらず、ご利用者と園児のふれあいがなく、情報交換も大きな行事の時にのみ行われている状況で、併設施設の良さを活かすにいた。併設の夜間保育園との世代間交流のお話がきて、現状打開のための計画を、開始した。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目標】

1. ショートステイ職員の連携の強化
2. ご利用者の情報共有を増やす
3. ご利用者にアクティビティーの機会を作る
4. アクティビティーの1つとして園児との交流をおこない、世代間交流による、ふれあい・愛着・子どもの頃を思い出すなど、心の動きを促す
5. 保育と介護の職員間連携を強化する
6. 園児がいつでも遊びに來たいと思う・遊びに來られる雰囲気や環境作り

以上6項目を目標とし、ショート職員の仕事に対する姿勢やご利用者状況の変化、保育園児の表情観察および保育職員との職員間連携を捉えていく。

《3. 具体的な取り組みの内容》

当事業所は、登録者数185名、月平均ご利用

用者数約100名、1日の定員19名で、リピート率は96%である。対象者は、平成24年度登録されている185名と、当夜間保育園児28名である。保育職員代表者1名、ショートステイ代表者1名で日時を設定し、保育側が、毎回4～5名の園児を連れて、ショートステイにて交流を行う。午後4時から30分間、1年間を通して週1回のペースで実施。事前に決めるのは日時だけで、何をおこなうかは、その時に相談して決める。交流することを定着させることを主目的とした。ショートステイ職員10名、保育職員10名がそれぞれ関わり合い、代表者だけが対応するのではなく、どちらも職員全員で携わることとした。部署間の連携は、法人内メールで調整を行い、決定次第周知をする。感染症流行の時期は、拡大を防ぐために、特変者がいた場合は、期間を決め中止している。遊ぶ際に用いる道具などは、保育園側より、持ち出して来てもらう物とショートステイで用意したものを互いに持ち寄ることで新たな費用はかからない。活動の成果は、保育園児とご利用者の距離感が、互いの笑顔や、職員の動き、コミュニケーションが増えたことによりわかる。その場で決めた交流の内容は、折り紙、カレンダー作り、紙芝居読み聞かせ、ギター弾き語りと園児合唱、園児のダンス披露、パズルなどであった。

《4. 取り組みの結果と考察》

ショートステイ職員が、交流の場に参加しようとする意識が生まれ、保育園児とご利用者に寄り添うことで、新たな情報の収集と共に、得られた情報をその後のケア業務の中で言葉かけなどへ繋げることができた。

職員の意識改革としての具体例は、交流に参加する為に要領良く業務を行なおうとする職員も現れ、職員同士の連携もうまれた。職員の中で「誰々の笑顔が見れた。」「～さんは、昔こうゆう方だったんだ。」「次はいつ来るのだろう。」という声も聞かれ始めた。ご利用者からは、「かわいいね。」「こっちにおいで。」「この前の子だ。」という声も聞かれ、楽しまれていた

方もいれば、「うちの孫みたい。」と涙を流されたり、笑顔も見られた。顔なじみの関係となると、ご利用者から近づき手を伸ばし抱きかかえる光景を目にする場面も出てきた。子ども達も自らご利用者の隣の席に座り、自然に話しかける雰囲気となった。職員に対しても同様に抱きついてきたり、甘える様子も見るが増えた。また、対象的に「私は子どもが苦手なの。」と居室に戻られてしまう方もいた。回を重ねる毎に代表者同士でのコミュニケーションが増え、調整がスムーズになり、介護と保育の連携の架け橋となった。いつでも来れるという環境作りに関しては、互いの遠慮もあり、今後の調整がさらに必要である。

《5. まとめ、結論》

1. 職員の連携、コミュニケーションが増え情報に厚みが出てきていること。
2. ご利用者と園児が顔見知りになり、より良い関係性の構築が出来たこと。
3. 介護と保育の連携がスムーズに行える様になったこと。
4. ご利用者、園児の楽しみや感動・心の動きが増えたこと。
5. アクティビティの機会が増え、ご利用者満足に繋がっていること。
6. いつでも遊びに来れる環境作りの、必要性を理解できたこと。

上記6点により、世代間交流はプラスの要素が多いこと、継続の必要があること、更に充実させていくことの必要性が上げられる。今年度も継続しているため、成果を積み上げて行きたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用をしないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得た事とした。

【メモ欄】